

令和 2 年 6 月 5 日現在

機関番号：13901

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2016～2019

課題番号：16K02364

研究課題名（和文）伊勢物語の総合的研究

研究課題名（英文）Comprehensive Study on Isemonogatari

研究代表者

大井田 晴彦（Oida, Haruhiko）

名古屋大学・人文学研究科・准教授

研究者番号：70313179

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,000,000円

研究成果の概要（和文）：『伊勢物語』の、従来の研究の膨大な蓄積を踏まえ、さらに新たな知見を盛り込んだ注釈を完成させ、出版した。検索に便利な全自立語索引、和歌索引も備えている。現代語訳も正確でわかりやすいものとなった。一般から専門の研究者まで、幅広い読者に対応した注釈である。雑誌や紀要に発表した一連の論文では、『伊勢物語』のさまざまな章段について、具体的な分析を行い、その主題と方法、表現の特徴などを明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義

『伊勢物語』が、後の日本文学および文化の諸方面に与えた影響は甚大である。これまでの研究史の膨大な蓄積を踏まえ、かつ新たな知見を盛り込んだ『伊勢物語』注釈の完成は、『伊勢物語』のみならず、日本文学研究全般、芸能、美術などの諸分野の研究に資するところが大きい。便利な索引をはじめ、付録も充実している。この注釈は、一般から専門の研究者まで幅広い読者を想定している。大学はもとより、中学や高校の教室でも利用できるよう、わかりやすい説明を心がけた。

研究成果の概要（英文）：I completed and published the annotation for Ise Monogatari. This commentary is groundbreaking, full of new insights. This work fully absorbs the results of previous research. Modern translations are accurate and easy to understand. This work is available to general readers and specialized researchers.

In journal articles, I conducted a detailed analysis of various chapters of the Ise Monogatari, and clarified the characteristics of the subject, method, and expression.

研究分野：日本文学

キーワード：伊勢物語 歌物語 和歌

1. 研究開始当初の背景

『伊勢物語』は、多くの人々に親しまれてきた国民的な古典であり、中学や高校の教材にも必ず取り上げられている。後の文学のみならず、芸能や美術にも多大な影響を与えてきた。日本文化の大きな流れを形成してきた作品である。中世以来の膨大な研究と注釈の蓄積を有しており、現代に至っている。しかしながら、研究と読解の指針となるべき事典・辞典、要覧などは皆無といった現状にある。大小さまざまな事典・辞典が備わる『万葉集』『源氏物語』などとは、かなり状況が異なる。『伊勢物語』研究の蓄積を集成・整理・分類し、利用しやすいかたちで広く提供することが現在、求められている。研究の基盤を整備することで、従来の固定化した読みから脱却し、作品解釈の刷新・更新をはかりたい。本研究のめざす『伊勢物語事典(仮称)』は、『伊勢』研究のみならず、古典文学研究全般、さらには他の学問諸領域にも大いに裨益するものである。

『伊勢』の注釈は数多い。その時代を反映して、荒唐無稽なものも含めて、さまざまな注釈が試みられてきた。平成以後でも、優れた『伊勢』注釈は次々と刊行されている。しかし、注釈とは常に更新、刷新されるべきものである。『伊勢』の難解な本文は、さまざまな解釈の違いを生じさせてきた。正確に読み解かれていない箇所も多い。これまでの注釈の成果を存分に踏まえながら、新たな解釈を示したい。従来の研究では鑑賞・批評の面がやや手薄であった。現在、この側面に重点を置いた注釈が求められている。

2. 研究の目的

『伊勢物語』は、その著名度と研究の膨大な蓄積にもかかわらず、研究の指針となるべき事典・辞典は編まれてこなかった。種々の事典類に恵まれた『万葉集』『源氏物語』などとは対照的である。『伊勢物語』研究のさらなる発展のためにも、これまでの膨大な研究の蓄積を集成・整理・分類し、活用できる事典が必要と考えられる。この事典は、『伊勢』や王朝文学の研究に資するだけではない。むしろ、後代の文学、中世和歌、謡曲、西鶴の浮世草子といった後代の文学、あるいは『伊勢』を題材とする絵画、工芸などの研究において威力を発揮するはずである。人文学研究全般に広く利用される事典の完成をめざしたい。

『伊勢』の注釈は、中世以降、無数にあり、その内容もその時代を反映して多様である。平成以降も、優れた注釈は少なくない。しかし、本文の難解さゆえに、まだ解釈の一致を見ない箇所も多い。従来の注釈の成果を批判的に摂取しながら、解釈の刷新をはかりたい。注釈とは、語義の説明や、原文の現代語への置き換えに終始するものでは、もちろんない。鑑賞や批評を重視した注釈が、とりわけ『伊勢』には望まれる。また、『源氏物語』への影響を重視した注釈としたい。『源氏』から光を照射することで、『伊勢』の特徴が新たに浮き上がってくると期待されるからである。中学校・高等学校から大学の教室まで、一般読者から専門の研究者まで、幅広い層に開かれた、かつユニークな注釈をめざしたい。

3. 研究の方法

本研究は、(1)『伊勢物語事典(仮称)』の作成 (2)『伊勢物語』注釈の作成、の二つを柱としている。まず(1)『伊勢物語事典』は、七つの章、セクションからなり、これを研究代表者と、研究協力者が共同で進めてゆく。協力者は、いずれも『伊勢物語』および平安文学について深い知見を有しており、各人の最も得意とする領域を中心に研究を分担、遂行する。また、互いの進捗状況を確認し、かつ現時点における成果の発表の場として、各年度2回程度の研究発表会を開催する予定である。それぞれの柱が、やがて結集、統合され、『伊勢物語事典(仮称)』の中核をなすことになる。その七つの柱とは以下のとおりである。「『伊勢物語の諸本』」では、諸本について、その書誌、本文の特色などについて、調査し、解説を加える。「『伊勢物語の研究史・注釈書』」については、中世および近世の古注釈書を中心に、近現代の主要な注釈書までを対象として、その書誌、特色、注釈史上の意義について調査する。「『伊勢物語と和歌集』」では、伊勢物語和歌総索引を作成し、それぞれの和歌の他出状況(万葉集・古今集・古今和歌六帖・業平集・大和物語など)や、引き歌・本歌・類想歌などが容易に一覧出来るようにする。「『伊勢物語と史書・漢籍』」は、物語に見られる史書や漢籍の引用について、古注釈以来の指摘を再検討し、さらに新たな知見を加えて整理し、検索の便に備えるものである。「『伊勢物語と源氏物語』」は、物語が『源氏物語』に与えた影響について、広く精査し、一覧できるようにするものである。「『伊勢物語と絵画』」は、『伊勢』を題材とする絵画の重要なものについて解説し、章段および場面選択について、一覧できるよう図表化する。物語本文と絵画の関係について、注釈史も視野におさめつつ考察する。「『全自立語辞典』」では、物語中の全自立語について、その語義、用例、用法などを説明する。

(2)『伊勢物語』注釈の作成は、(1)の事典作成と緊密に連携している。それぞれの成果を相互に反映させつつ、研究を進めてゆく。この注釈は原文・語釈・補注・現代語訳・鑑賞、そして解説および付録から構成される。原文は、底本である学習院大学蔵本を翻刻・校訂する。語釈は、これまでの注釈の成果を踏まえつつ、新たな知見を盛り込む。特に類歌・参考歌の指摘を充実させたい。補注では、他出や典拠などについて踏み込んだ説明を加える。現代語訳は、原文に

忠実かつ読みやすい自然な訳を心がける。鑑賞は、各章段の魅力をわかりやすく説明する。「みやび」の問題や『源氏』への影響を重視したユニークなものとした。解説では、『伊勢物語』の主題、成立、在原業平、文学史的意義など、作品の本質にかかわる問題について説明する。付録は、年表、系図、全自立語索引、和歌初句四句索引からなる。とりわけ、全自立語索引は、物語の読解・研究に資するところ大であろう。

4. 研究成果（すべて研究代表者単独のもの）

（著書）

（1）『伊勢物語 現代語・索引付』、東京、三弥井書店、1～335、(2019)

（論文）

（1）「『竹取物語』「龍の首の珠」」、鈴木健一編『海の文学史』、東京、三弥井書店、46～58、(2016.07)

（2）「流離とみやび 津の国の行平・業平兄弟」、『名古屋大学文学部 研究論集 文学 63』、135～147、(2017.03)

（3）「葵上の生と死」、『名古屋大学人文学研究論集』第1号、459～471、(2018.03)

（4）「伊勢物語の終焉」、『国語と国文学』第95巻5号、90～102、(2018.05)

（5）「伊勢物語の男たち—紀有常と藤原敏行をめぐる—」、『名古屋大学人文学研究論集』第2号、339～350、(2019.03)

（6）「伊勢物語と大和物語」、『名古屋大学人文学研究論集』第3号、373～385、(2020.03)

（学会発表）

（1）「忠こそ悲劇 『うつほ物語』の長篇性と短篇性」、名古屋平安文学研究会、於名古屋大学(2016.6.19)

（2）「伊勢物語の終焉」、名古屋平安文学研究会、於名古屋大学(2018.6.17)

本研究の最大の成果は、著書（1）の注釈である。これまでの注釈の成果を踏まえつつ、新たな解釈の提示を試みた。現代語訳も、わかりやすく単独でも味読できるものを心がけた。鑑賞では、その段の魅力、面白さを伝えようとしたつもりである。特に「みやび」と『源氏』への影響についての言及に多くを費やしている点に、本書の特色がある。また、全自立語索引と和歌初句四句索引を付録とし、検索の便をはかった。一般読者から、専門の研究者まで幅広い層の要求に応える注釈といえる。

論文（2）（4）（5）（6）および学会発表（2）が『伊勢物語』に関するものである。論文（2）では、業平の兄行平の登場する段を取り上げ、その特徴を明らかにした。また、九十七段や百十四段のように、行平の和歌が業平の歌として物語に取り込まれていく問題について論じた。論文（4）および学会発表（2）では、『伊勢』の「死」を扱った章段を取り上げた。特に最後の定家本百二十五段を、塗籠本や『大和物語』などと比較し、主人公の死の意味について考察した。論文（5）は、業平の義父有常と義弟敏行の登場する段を取り上げ、主に「みやび」の観点から考察した。（6）は、『伊勢』と『大和』に共通する章段を比較して、考察した。『伊勢』に比べて評価の低い『大和』だが、『伊勢』を意識しつつ、独自の論理で新たな物語の創造を目指していることを明らかにした。

『伊勢物語』以外の作品に関するものとして、論文（1）と学会発表（1）がある。論文（1）は、『竹取物語』の「龍の首の珠」の段を取り上げ、漂流譚の問題、大伴御行の人物造型などについて論じた。学会発表（1）は、『うつほ物語』の中でも短篇性が強いと評価されてきた忠こそ物語を長篇の中に位置づけて論じた。

なお、『伊勢物語事典』については、現在、準備中である。なるべく近い完成、発表をめざしている。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計6件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 3件）

1. 著者名 大井田 晴彦	4. 巻 3
2. 論文標題 伊勢物語と大和物語	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 名古屋大学人文学研究論集	6. 最初と最後の頁 373 - 385
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） info:doi/10.18999/jouhunu.3.373	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 大井田 晴彦	4. 巻 95-5
2. 論文標題 伊勢物語の終焉	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 国語と国文学	6. 最初と最後の頁 90-102
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 大井田 晴彦	4. 巻 2
2. 論文標題 伊勢物語の男たち 紀有常と藤原敏行をめぐって	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 名古屋大学人文学研究論集	6. 最初と最後の頁 339-350
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） info:doi/10.18999/jouhunu.2.339	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 大井田晴彦	4. 巻 1
2. 論文標題 葵上の生と死	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 名古屋大学人文学研究論集	6. 最初と最後の頁 459-471
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 大井田 晴彦	4. 巻 63
2. 論文標題 流離とみやび 津の国の行平・業平兄弟	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 名古屋大学文学部研究論集 文学	6. 最初と最後の頁 135-147
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) http://hdl.handle.net/2237/25900	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 大井田 晴彦	4. 巻 -
2. 論文標題 『竹取物語』 「龍の首の珠」	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 海の文学史	6. 最初と最後の頁 46-58
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

[学会発表] 計2件(うち招待講演 0件/うち国際学会 0件)

1. 発表者名 大井田 晴彦
2. 発表標題 伊勢物語の終焉
3. 学会等名 名古屋平安文学研究会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 大井田 晴彦
2. 発表標題 忠こそ悲劇ー『うつほ物語』の長篇性と短篇性ー
3. 学会等名 名古屋平安文学研究会
4. 発表年 2016年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 大井田 晴彦	4. 発行年 2019年
2. 出版社 三弥井書店	5. 総ページ数 335
3. 書名 伊勢物語 現代語訳・索引付	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----